

# 女戦士が満足して死ぬ 話

書いてて何を書いているか分からなくなつた

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作者が受けた精神的動揺を吐き出す為に書いた物

女戦士が産まれて死ぬまで、3話まであるけど需要ないだろうし1話だけ投稿  
相当暇な人はどうぞ、感想で質問を受け付けてます。気づいたら返します

# 目次

女戦士が満足して死ぬ話

—  
1



# 女戦士が満足して死ぬ話

あたしは、まあまあ名の知れた戦士だった

普通の家庭に生まれ、男勝りな性格で、野生児みたいな育ち方をして、腕っ節だけを頼りに冒険者になった

最初のクエストは、自信過剰すぎて一人でゴブリン討伐を受け、危うい所を師匠に助けられた

その後は師匠に戦い方、冒険者として生きていくための知識、他にも色々な事を教えられた

そして数年たった頃、もう教える事は無いと放り出され、その後は気ままにパーティを組んだり組まなかったりして色々な場所を旅した

ある日、世界の情勢が一気に悪化した、魔物は蔓延り、国々は争い、終末論者が今時物語ですら出て来ない魔王が復活したと騒いでいた

んで、ある馬鹿がそれを真に受けてその討伐に乗り出した

あんまりに阿呆らしくて……そいつの話に乗った。面白そうだったから

その馬鹿は武器の振り方もからつきしで、魔法も使えず、野宿の仕方すら知らなかつ

た

その頃は仲間もあたし一人で、そいつに戦い方を教えながら町から村、都市、いろんな場所を旅しながら沢山の冒険をした

魔物に困ってる村を助けたり、金持ちの欲しがる変な素材を探したり、闘技場の大会にも出た

最初は弱かった馬鹿も旅を続ける内にどんどん強くなり、仲間も増えて行った  
優しくて料理が上手でいつもあいつの心配をしている僧侶

根暗で会話が苦手でクールぶってる、でもさびしがりの魔法使い

旅を続ける内、世界はどんどん暗くなつて行った、滅んだ国すら出てくるようになって  
た

魔物は強くなり、人々の争いは酷くなり、マジで魔王の部下すら出てきやがった

馬鹿は勇者と呼ばれる様になり、本当に聖剣とか言う奴を抜きやがった

僧侶は勇者を支える聖女と呼ばれ、とんでもない奇跡すら使うようになった

魔法使いは賢者と呼ばれる程になって、滅んだと言われていた呪文だつて使うように

なつた

あたしは変われなかつた、剣しか振れなかつた

勿論足を引つ張ったりはしない。そこまでは弱くない

でも、あたしはすごいみんなを守る事しかできない。勇者も聖女も賢者もあたし程身体が強くないからあたしの頑丈さが役に立った

あたしは怖いものなんて無かった、痛いのだって慣れっこだ。だからあいつらを守るでもあたしの剣は最早ほとんど通らない程になっていた

だから剣は構える程度にして、大きな盾を持った。でつかくて大きな鎧を着けた

いつからか騎士って呼ばれるようになった、あたしはそんなにいい人間じゃないのに子供の頃から勝つのが好きだった、負けた奴の悔しそうな顔が好きだった

子供の頃から戦うのが好きだった、痛みすら楽しかった

子供の頃からあたしはちよつと狂ってた、知らない誰かが死んだってどうでもよかった

だからあたしは親しい誰かは作らなかつた、師匠ですら大して仲良くはならなかつた戦つて、戦つて、戦い続けて、それでよかった

傷だらけで、血まみれで、苦しくて、積み上がった屍の量と己の技量、そして自分の傷の数に快感すら感じてた

そんなあたしにあいつらは構い続けた

勇者は最初の頃からあたしについて回つて、あたしが皮肉を言ったり、弱さを馬鹿に

した時ですら困ったように笑いながらあたしを褒めて、諦めずに努力した

どんなに馬鹿にされても、どんなに苦しくてもあいつは笑顔を忘れず、敵にすら優しく、みんなを笑顔にする事を考えてた

聖女はそんな傷だらけの勇者を見て放って置けないからって着いて来た、焼いたり煮た肉とパンばかりだったあたし達の料理に白目をむいて固まってた時とか面白かった！

その後はあたしに怒りながら旨い料理を振舞ってくれた、あれは本当に美味しかった…

傷を負えば癒し、勇者に奇跡の使い方を教え、適当だった金の管理すらしてくれた常にみんなの心と体に気を配ってくれた、勇者の馬鹿みたいな考えすらちつとも笑わずに聞いて、大真面目にその考えを褒めて、本気で協力してた

賢者は最初魔王軍にやられて死に掛けてた、そこをあたし達が助けて、それからついてくるようになった

最初は黙ってて何も話してくれなかったけど、勇者と聖女がしつこく構い続けてたらその内口を開くようになった

これが案外寂しがり屋だったみたいで開くようになったら今度は勇者と聖女にべつたりになって、あろう事があたしにすら甘えてきた。まあ、あたしも鬼じゃないからそ



んな時はちよつとは構つてやつた

なんだかんだ意外と可愛い奴だったけど、敵には容赦なかったね、呪詛に内部からの爆殺に汚泥に目潰し：：流石に引いた

せめて上辺だけでもあいつらに相応しく見えるようにあたし：：私は言葉遣いを改めてめた

皆の名声に傷は付けたくなかった、後ろ指を刺される様な奴にはなりたくなかった胸張つて、歯を食いしばつて、どんな奴にもかっこよく正面に立つて、どんな攻撃だつて止めて見せた

でも：：魔物は、魔族とやらは強く、そして卑怯だった

どれだけ戦つても、奴らはその裏を搔いて来た、私達の居ない場所を襲い、人々が憎みあい、争うように仕向け、その上私達に冤罪すら擦り付けてきた

私達の心の中すら公然で暴き、悪し様に喋り、嘲つて来た

勇者には救えなかった人を、聖女は秘めた想いを、賢者は後ろ暗い過去を

私は血塗られた過去と嗜虐心を

：：私は叫んだ、他の人は違う、勇者は救えなかったけど、それでも戦つてる、どんなに辛くても、傷ついてても、思い悩んで絶望しかけても、それでも前を向いて必死に戦つ

てると

聖女は確かに勇者にとんでもない想いを抱いていた、だけどそうだとしても彼女は私達を助けてくれた、何時だって堪えていた、何も恥じる事なんてしていないと

賢者は変わった、何も知らず悪事に手を染めていた過去と決別し、本気で皆を救おうとしていると、口下手で捻くれてて正直って言葉をどっかに忘れてきたような奴だけど、その意思は本物だつて

でも、自分の事だけは否定できなかつた。だつて私は何も変わつてないから未だに戦いは大好きだ、正直平和に興味は無い。

殺し合いは楽しいし、敵の歪む顔を見る時が一番気持ちよかつた

苦しみすらもその一環だつた

皆は何も知らないから庇つてくれた、でも他の誰でもない私が一番よく知つていただから

本性を剥き出しにしてやった！あの時の怯えて命乞いをする魔族は最高だつた！！

勇者達には申し訳ないとは思つた、でも我慢できなかつた

あの屑が皆を馬鹿にするあの顔を！あの口を！あの精神を！どこまでもぐちやぐちやにしてやりたくてしようがなかつた！

最高の気分だつた！奴らすら知らない方法で苦しめてやった！骨を折り！目を抉り

！性器をもぎ取り！顎を引き裂き内臓を抉り出した！

無駄に頑丈だから甚振り甲斐があつた、爪を剥ぎ！腕を引っこ抜き！鼻を引きちぎり！何度も顔を殴りつけた！

最後は許しを請う事すらできなくなった、喉の中に手を突っ込み、脊髄を握って引きずりだしてやった！

全てを忘れ、久々に暴れ狂つたのは最高だった！抑えていた獸性は、溜め込んだ憎しみは魔族共を凌駕する狂気になつていたらしい

怯え、へたりこみ、呆然としている勇者達を置いて私は一人で歩き出した  
流石にあの後も一緒に居るのは無理だろう

嫌いじゃなかった、むしろ好意的だったが……私は我慢できなかった  
後悔は無かつた、あの糞野郎を滅茶苦茶に出来たのだから

少々寂しかったが気分が良かった

その後は一人で戦いに没頭した、とにかく屑共が多い場所へ行き、片っ端から殺して  
回つた

より頑丈になつた身体に任せ、兎に角力で捻じ伏せた

振るわないで居た暴力は、獸性に任せ振り回せば案外悪くなかつた

やはり追い込まれる事もあったが、死を厭わず突き進めば何とかなった

内臓は零れ、片目は潰れ、指も減ったが、敵の血を吸うという魔剣を手に入れた頃には重大な傷も減って行った

殺して、殺して、殺して：： そうした果てには：：

最早人ではなくなっていた、角が生え、牙を剥き、潰れた眼からは火がふき出し、肌は赤く、手足は虎のようで、身に付けていた鎧は最早襤褸切れだ

まあ、むしろ好都合だった、頭も口も手も足も全部武器として使える、目から光線が出た時は笑った。意外と便利だった

満足していた、何時の間にやら魔界に足を踏み入れていたようで、敵もどんどん強くなったがそれも好都合だった

信じて居ない神に感謝した！あの時の屑もちよつとは役に立った！どんなに甚振り、苦しめ、ぐちゃぐちゃにしても問題ない敵があたりに溢れていた！

私はやりたいままに殺しを続け、四天王とやらも惨殺した

流石に都合が良すぎて幻覚も疑ったが、この血と敵の強さと痛みは間違いなく人間の物ではなかった

私は鬼になったが元仲間への罪悪感ぐらいは残っていたから、人間は殺したくなかった

どいつもこいつも無知蒙昧で、勇者達に本気で感謝して全財産を差し出すどころか、疑い罵倒し武器さえ向けた

正直殺したかったが仲間達が嫌がるから冗談で済ませた

まあ、だからこうなる事も想像していた

あの頃より立派になった勇者達が私の前に立っていた

見つけられなかった魔王城の場所を暴き、精霊？だか天使だかを連れて居た

私の事はこんなになっても一目で見抜いた

正直私なんかの事は忘れて欲しかったのだが……無視して魔王城に突っ込もうとしたが聖女がそれを阻んだ

賢者が私を拘束し、ようわからん奴が私の力を弱め、勇者が私に剣を突きつける

抵抗しても良かったが……まあ、散々楽しんだしここで終わっても良かった

勇者達が困らないように、ちよつと魔族を絶滅しておきたかったが、勇者は魔族にすら慈悲を向けているらしかった

勇者はこの期に及んで泣いて、怒って、問い詰めてきた。聖女も私の善意を信じ、洗脳を疑い、懺悔と贖罪を促してきた。賢者は私に泣きついてきた、縋り付いてきさえした。精霊はただ悲しそうに私を見ていた

そう言われてもこれは私の本性で、特に後悔も無かった、嘘を付くのも性に合わないし、堂々と胸を張って言った。これが私だ、自由に気ままに暴力が大好きな化け物が私だと

そうして私は勇者に殺された、まあ、楽しい人生……ああ、化物生かな？ だった

勇者は立派になったし、聖女はそんな勇者に寄り添ってた、たぶんデキてると思う。賢者も二人が居れば心配ないだろう。精霊は……なんか見覚えある気がするけどまあいいか、知らんし。

とつても強くなつてた、私が即座に壊せない程の障壁、私が反応出来ない程の速さの拘束、かなりの強さの弱体化

そして、そんな状態とはいえ、私を一撃で斬り捨てたあの一撃……きつと魔王も倒せるだろう

うん、大丈夫。あいつ等なら魔王に勝って幸せになれる

私は満足して死んだ